



TITLE:

甲状腺癌の両側腎転移の1例

AUTHOR(S):

稲原, 昌彦; 三上, 和男; 戸辺, 豊総; 鈴木, 啓悦; 伊藤, 晴夫

CITATION:

稲原, 昌彦 ...[et al]. 甲状腺癌の両側腎転移の1例. 泌尿器科紀要 2002, 48(5): 315-317

ISSUE DATE:

2002-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114747>

RIGHT:

甲状腺癌の両側腎転移の1例

千葉大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 伊藤晴夫教授)

稲原 昌彦, 三上 和男, 戸辺 豊総
鈴木 啓悦, 伊藤 晴夫A CASE OF THYROID CANCER METASTASIZING
TO THE BILATERAL KIDNEYSMasahiko INAHARA, Kazuo MIKAMI, Toyohusa TOBE,
Hiroyosi SUZUKI and Haruo ITOU

From the Department of Urology, Chiba School of Medicine

A 66-year-old woman was admitted with a chief complaint of macroscopic hematuria. She had a past history of mediastinal tumor that had been surgically treated 11 years earlier and had been pathologically diagnosed as papillary thyroid cancer. Enhanced computed tomography demonstrated slightly enhanced renal tumors in both kidneys. Endoscopic findings showed bleeding from the left ureteral orifice. To control macroscopic hematuria, left nephrectomy was performed. Since, two months later severe bleeding occurred from the right ureteral orifice, right nephrectomy was performed and hemodialysis was initiated. The pathological findings of the bilateral renal tumors were papillary thyroid cancer suggesting metastases from the primary mediastinal tumor.

(Acta Urol. Jpn. 48: 315-317, 2002)

Key words: Metastatic renal tumor, Thyroid cancer

緒 言

転移性腎腫瘍は文献によれば剖検例での1.8~18.8%に認められるという報告があるが¹⁾, 生前に診断されることは稀である. 今回われわれは甲状腺癌摘除術10年後の両側腎転移の1症例を経験したので報告する.

症 例

患者: 66歳, 女性

主訴: 肉眼的血尿

家族歴: 母が肺癌にて死亡

既往歴: 21歳時, 虫垂炎にて手術

現病歴: 1988年縦隔腫瘍の診断にて当院肺外科で腫瘍切除術施行. 病理組織診断は乳頭状甲状腺癌であった. 1997年10月肉眼的血尿が出現したため近医受診. 両側腎腫瘍が指摘され, 翌年1月5日当科受診した.

入院時現症: 前胸部から右側頸部にかけて手術痕を認めた. 表在リンパ節, 腹部腫瘍は触知しなかった.

入院時検査所見: 尿中赤血球多数/hps, 尿中白血球約 30/hps 以外に血液, 尿に異常所見なし. 尿細胞診はクラス I であった.

画像所見: 腹部 CT にて右腎に 3.0×2.5 cm の軽度造影される境界明瞭の腫瘍が (Fig. 1A), 左腎に



Fig. 1A. Enhanced abdominal CT showed right renal tumor.

3.0×3.0 cm のごく軽度造影される境界明瞭の腫瘍が認められた (Fig. 1B).

経過: 膀胱鏡にて左尿管口からの出血が認められた. 血尿はしだいに強くなり, 著しい貧血を認め輸血をしなければ失血死の危険があった. 1998年4月24日左腎細胞癌の診断のもと血尿のコントロール目的で左腎摘出術が施行された.

肉眼的所見: 左腎のほぼ中央から上部にかけ直径 3.3 cm 大の腫瘍を認めた. 腫瘍の一部に腎盂に突出していた.

病理組織学的所見: 1988年に摘出した原発性甲状腺癌の HE 染色標本はクロマチンの凝集した核異型を



Fig. 1B. Enhanced abdominal CT showed left renal tumor.

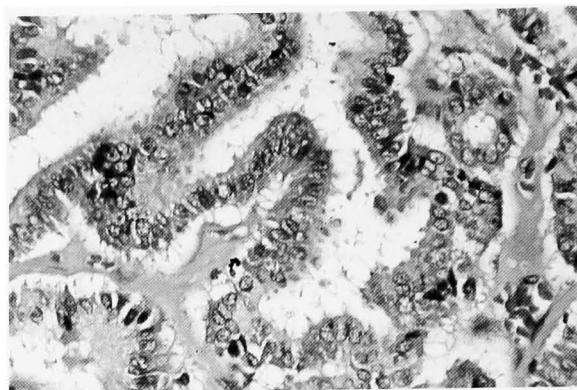


Fig. 2B. Microscopic findings of the left kidney show papillary adenocarcinoma similar to the primary thyroid cancer (H & E, $\times 400$).

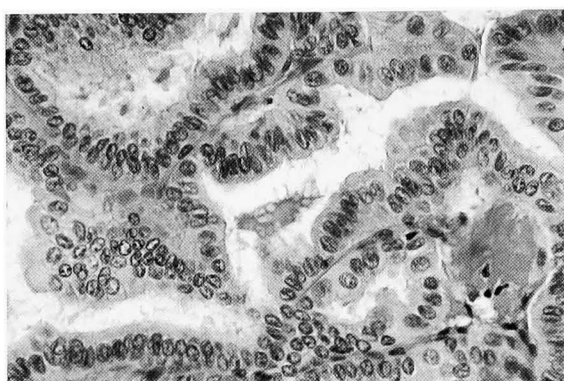


Fig. 2A. Microscopic findings of the primary thyroid cancer show papillary adenocarcinoma (H & E, $\times 400$).

有する細胞が増殖し、構造異型のある papillary adenocarcinoma の組織像を呈していた (Fig. 2A). 今回摘出した左腎腫瘍の HE 染色クロマチン標本は凝集した核を有する増殖細胞からなる papillary adenocarcinoma の病理診断であり、甲状腺乳頭状癌の左腎転移と考えられた (Fig. 2B).

術後経過：術後経過良好にて一旦退院になったが2ヵ月後に再度血尿を呈し同年6月12日止血目的で右腎摘出術を緊急に施行した。病理診断は甲状腺乳頭腺癌の右腎転移であった。術後は血液透析が導入されたが、1ヵ月後に誤嚥性肺炎を起こし死亡した。

考 察

われわれが調べたかぎり転移性腎腫瘍は本邦で74症例が報告されている。原発巣の中では肺癌29歳、食道癌12例、子宮癌11例、甲状腺癌9例が多かった。性差は男性43例、女性31例。年齢は21歳から88歳、平均年齢は56歳であった。左右差は右腎38例、左腎31例、両腎5例となっていた。転移巣の主訴は血尿35例、側腹部痛22例が多かった。治療は腎摘出術が55例に施行されていた。

甲状腺癌の腎転移は自験例を含めて本邦で9例あり Table 1 に示した。年齢は47歳から68歳、平均年齢は62歳である。性差は男性1例、女性8例と女性に多かった。これは甲状腺癌の男女比が1対3と女性に多いことが原因の1つと考えられる。また原発巣に対する治療から発見までの期間は甲状腺癌以外のものでは平均1年7ヵ月であるのに対して、甲状腺癌の場合は治療から平均13年7ヵ月であった。これは甲状腺癌の中でも90%を占める甲状腺乳頭状癌、濾胞癌が比較的 slow growing tumor であるためと考えられる。今回の症例では転移は両側に発生しているため、全身に腫瘍細胞が転移している可能性は否定できなかったが著しい血尿によって全身状態の悪化を認め輸血をしなければ失血死の危険があったため、最初に左腎摘出術を

Table 1. Renal metastases originating from thyroid cancer reported in Japan

No.	症例	年齢	性別	前治療	患側腎	主訴	組織型	転移巣に対する治療
1	2)	47歳	女	放射線療法	両側	右側腹部腫瘍	濾胞癌	放射線療法
2	3)	52歳	女	放射線療法	左	肉眼的血尿	乳頭癌	腎摘除術
3	4)	63歳	女	手術療法	右	肉眼的血尿	乳頭癌	腎摘除術
4	5)	65歳	女	手術療法, 放射線療法, 化学療法	右	肉眼的血尿	乳頭癌	腎摘除術
5	6)	63歳	女	手術療法	右	無し	濾胞癌	腎摘除術
6	7)	77歳	女	手術療法	左	無し	濾胞癌	腎摘除術
7	8)	68歳	女	手術療法	左	左側腹部腫瘍	濾胞癌	腎摘除術
8	9)	53歳	男	手術療法	左	無し	乳頭癌	腎摘除術
9	自験例	66歳	女	手術療法	両側	肉眼的血尿	乳頭癌	腎摘除術

ついで右腎摘出術を緊急手術として行った。右腎に対しては右腎部分切除術や選択的動脈塞栓術も考慮されたが、左腎腫瘍が甲状腺癌からの転移であるため予後は悪く、それら縮小手術の後で本来の目的である止血が得られずに再手術をするリスクがあることを考えると一期的に右腎摘出術を施行して血液透析に移行した方が QOL を改善するだろうと判断した。

上記したようにわが国の転移性腎腫瘍74症例中の内、両側発生例は5例であり自験例以外の治療方法は radon seeds による irradiation が1例、化学療法が1例、摘出術と化学療法の併用が1例、治療なしが1例であった。平均予後は4カ月であるが片側性の腎転移と比べて予後に差はなかった。

結 語

66歳、女性で甲状腺癌の術後10年目で発生した両側腎転移を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) Wagle DG, Moore RH and Murphy GPP:

Secondary carcinoma of the kidney. J Urol **114**: 30-32, 1975

- 2) Takayasu H, Kumamoto Y, Terawaki Y, et al.: A case of bilateral metastasis renal tumor originating from a thyroid carcinoma. J Urol **100**: 717-719, 1968
- 3) Okada Y, Nonomura M, Terashi T, et al.: Unilateral and solitary renal metastasis from well differentiated thyroid carcinoma initially treated 22 years before. Acta Urol JPN **25**: 1043-1047, 1979
- 4) 中牟田誠一, 上田豊史: 転移性腎癌の1例. 西日泌尿 **41**: 973-976, 1979
- 5) 日高良一, 松本 泰, 浜田吉道, ほか: 甲状腺癌の腎転移例. 日泌尿会誌 **73**: 828, 1982
- 6) 天野俊康, 岡所 明, 久住治男, ほか: 甲状腺癌の腎転移例. 臨泌 **38**: 701-704, 1984
- 7) 金子克美, 迎圭一郎, 鈴木 徹, ほか: 転移性腎腫瘍の1例. 西日泌尿 **55**: 213-216, 1993
- 8) 藤村哲也, 鈴木 誠, 松島 常, ほか: 甲状腺癌腎転移. 臨泌 **52**: 691-693, 1998
- 9) 井上洋二, 森山浩之, 持月英樹, ほか: 甲状腺癌腎転移. 臨泌 **55**: 1049-1051, 2001

(Received on January 17, 2002)

(Accepted on February 15, 2002)